

聞き書きでつづる

新座・女たちの歩み



新座市

にいざ女性の歴史を知る会

聞き書きでつづる

新座・女たちの歩み





発刊に寄せて

新座市長 須田 健治

少子高齢化の進展と人口減少社会の到来、家族形態や個人の価値観の多様化、経済の長期的低迷など、社会環境が大きく変化する中で、これらの変化に対応し、一人ひとりの人権が尊重される真に豊かで活力ある社会を創造するためには、男女が性別にとらわれることなく、あらゆる分野で共に参画できる新しい社会の実現が強く求められています。

新座市においても、平成一二年には埼玉県下で初めてとなる「新座市男女共同参画推進条例」を制定したほか、平成一三年には「男女共同参画都市」を宣言し、男女共同参画のまちづくりを進めてまいりました。

また、平成一四年には、女性と男性のよりよいパートナーシップを築くための拠点として男女共同参画推進プラザを開館し、男女共同参画意識の啓発を図るための講座・講演会・パネル展示などの事業を実施してきたところであります。

一六万人の人口を擁する本市には、戦前から戦後の激動の時代を生き抜いてきた女性の方も多くお住まいになっています。これら女性たちの生き生きとした姿を知ることによって、本市における男女共同参画のまちづくりが更に進展するのではないかと考え、この度、「聞き書きでつづる 新座・女たちの歩み」を発刊する運びとなりました。

本書は、それぞれの立場で本市の発展に御尽力を頂いた女性の皆様の体験談を、女性の視点でまとめ上げた聞き書き集となっています。これまであまり語られることのなかった本市の女性たちの生活が、ありのままの言葉で鮮やかによみがえってきます。ぜひ市民の皆様にも御高覧いただければと存じます。

最後になりましたが、本書の発刊に当たり、貴重な体験を語ってくださった皆様に厚く御礼を申し上げます。また、三年間にわたり、本書の聞き書き及び執筆に御尽力いただいた「にぎさ女性の歴史を知る会」の皆様を始め、素晴らしい表紙絵・挿絵で本書に彩りを添えてくださった原ミツル様に心から感謝を申し上げます。

平成二五年三月

発刊にあたって

にいざ女性の歴史を知る会

本冊子は、「にいざ女性の歴史を知る会」の活動の成果として刊行いたします。

男女共同参画審議会の提案をうけて、平成二二年、男女共同参画推進プラザ主催の「女性史発掘講座」が開催されました。女性の姿が希薄であった過去の歴史に女性の視点を加えることで、歴史への理解をより深める目的です。講座終了後、受講生に呼びかけて、同年八月「にいざ女性の歴史を知る会」が発足しました。

さつそく、新座に住んでおられる女性たちに声をかけました。何を思い、どのように生活していたかをお聞きし、その生き方を記録する作業を始めたのです。

今回、ご協力いただいた二八名の方は、どなたも温かい態度で接してください、経験なされた多くの体験を率直に語ってくださいました。とても嬉しいことでした。録音させていただいたお話を文字に起こし、内容を整理してから、まとまりのある文章としました。さらに内容が読者に伝わるように全員で検討し、その後、この原稿を語ってくださいた方にお見せし了解を得て、ようやく刊行までこぎつけることができました。

この冊子を作り上げて、確信したことがあります。家族を支え地域を支え、自ら努力を重ねた女性たちの日々の暮らしが、現在の新座市をつくってきた大きな力であったということです。読んでくださる市民の方々も、同じ思いを抱かれるのではないのでしょうか。

この冊子は、話し手の思いや生活がいきいきと伝わることを願って、できるだけその語り口を忠実に書き起こしたものです。ご理解のうえお読みいただければと思っております。

平成二五年三月

目次

母子に安全なお産を	渡辺 まさ(故人) …… 1
婦人会とともに歩む	並木 清子 …… 5
人口急増期の石神に住んで	宮澤 春美 …… 9
教員ひとすじ・有言実行	高橋 民子 …… 12
片山の大農家に生まれて	瀧島 貞子 …… 19
役場の住民係から市民課へ	金子 喜久代 …… 23
農家の暮らしとしきたり	新井 登代子 …… 28
	小見野 寿々 ……
	井原 ふみ江 ……
	岡野 裕子 ……
見続けた北野の八〇余年	高橋 花枝 …… 33
	尾崎 登美子 ……
P T Aは私の学校でした	関根 たづ子 …… 38
生きがいは婦人会と民踊	吉田 けい …… 44
母親たちの運動―子育てと教育	藤巻 トキエ …… 49
	竹森 絹子 ……



人形劇グループ「あおむし」とともに

女性の声を議会につなげる

情熱を燃やしたスポーツ振興

女三代の歴史を振り返る

シュールな絵を描き続けて

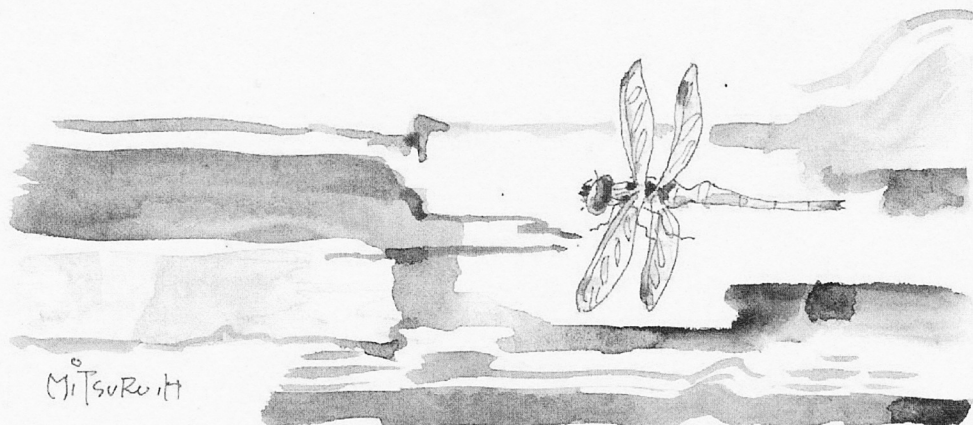
仲良し三人娘「北野八軒」を語る

恵まれた都市近郊の農家で

新たな農業に取り組む

盛田 悦子	………	54
光成 雅子	………	
川口 悦子	………	
太田 博子	………	61
遠藤 梯子	………	68
綿谷 信子	………	71
原 ミツル	………	81
梶原 トヨ子	………	87
尾崎 節子	………	
藤宮 はつ子	………	
大竹 京子	………	94
尾崎 千恵子	………	96

表紙『過去からの記憶』・カット
原ミツル



凡 例

- 一 本冊子は「にいぎ女性の歴史を知る会」が実施した平成二一年から二四年までの聞き取りをまとめたものである。
- 二 掲載の順序は、語り手（複数の場合はその最高齢の方）の生年順とした。
- 三 タイトルの次に、語り手の氏名、出生年、現在の居住地名を記した。
- 四 年月の表記は、原則として和暦を用い、必要に応じて（ ）内に西暦を併記したが、語り手の言葉を尊重し西暦を用いた場合もある。
- 五 記述は原則として現代仮名遣い、新字体を用いたが、固有名詞については、旧字体を用いた場合もある。
- 六 地名は当時における地名・町名を用い、（ ）内に現在の地名・町名を記した。
- 七 現在の人権意識では必ずしも適切ではない表現や、職業の呼称、固有名詞等もあるが、当時の歴史的用語であるとして、語りのままとした。
- 八 本冊子には、基本的人権にかかわる歴史的な事象を含む場合もあるが、これは地域の歴史を次世代に伝えるために必要なものであるとして取り上げた。

母子に安全なお産を

渡辺 まさ（故人）

明治四三（一九一五）年生まれ

大和田

渡辺まささんは平成元年に亡くなられましたので、ご子息の勝保さんにお話をうかがいました。

産婆を志すきっかけ

野火止の山下通りに、ヨシダ工業という土木の仕事を幅広く営業している会社があります。そこが母の実家なんです。あのあたりでは二本の指に入る土地持ちで、大きな農家でした。一番遠い畑は市役所の隣、今の埼玉縣信用金庫があるあたり。とにかく畑がいっぱいありました。母はその家の次女として生まれました。姉妹が三人、弟が一人いました。本来な

ら農家の働き手ですが、母は産婆という職業に目覚めて、勉強ばかりしていたそうなんです。姉たちは「まさには百姓が嫌いだから、畑やらないで勉強ばかりしている」っていじめたそうですが、心の中では、尊敬していたようです。

産婆を志したのは、一〇歳の時、近くの野火止用水に竹棒が四本さしてあり、それに白い布がかけてあったのを見たのが原点のようです。お産で亡くなった女性を供養する儀礼ですよ。

昔は、お金持ちか難産の場合でなければ、産婆にはかからなかったのです。お産で亡くなるお母さんや赤ちゃんが多かつ

たそうです。こんなことではいけないと、産婆さんになろうと思ったようです。それで、浦和にあった産婆学校に通ったんです。お昼頃まで畑仕事をして、手も洗わずに、自転車で志木の駅を通って秋ヶ瀬を越えて浦和まで、一時間半くらいかかるんじゃないでしょうか。それはもう、大変だったって言うてました。夜になるとランプをともし勉強してたらしいです。

野火止で産婆を開業

こうして産婆の免許を取り、大宮の武蔵野産院での研修を経て、昭和九（一九

三四）年に野火止で「産婆渡辺」という看板を出して開業しました。小見野さんという大きな農家から、野火止の今の旧川越街道と武蔵野線が交差したところに家を借りたんです。一部屋くらいでした。その後、大和田に家を買って、産院をつくったわけです。

私の父親は志木駅にあったタクシー会社で運転手をしていたんです。昭和十三年に私が産まりました。でも、父は私が五歳の時に結核で亡くなったんです。それから母が産婆をして育ててくれて。その頃は助手と、お手伝いさんが二人くらい、それからお産を勉強したいっていうお嬢さんがいましたね。

私が小学三年生の時に、母は再婚したんです。相手は鹿島建設に勤めていて、朝霞の米軍で自動車の運転関係の仕事をしていた人です。名字は渡辺姓を名乗ってもらいました。人柄のいい人で、私めもかわいがられました。

母の仕事にも理解がありましたね。家には、目玉の飛び出したでっかいダットサンがありましてね。今でも感心するん

ですけど、父は在宅している時は、お産が近づいた妊婦さんを車で迎えに行っていたのですよ。

取り上げた子は一万五千人

当時は一軒に四人くらい子どもがいた時代でしたね。遠いところでは、所沢の坂を越えて、滝の城址公園のあたりまで行きましたね。朝霞の泉水とか、新座では畑中や中野、堀ノ内、そのくらいは、へのカップだったんじゃないですか。何しろ広範囲でしたよ。車は自分では乗れないので、ほとんど自転車です。革製の鞆を自転車のカゴに入れて。体力がないとできないですよ。

野火止の近くなんかのお産だと、私に「あそここのうちに行ってお湯を沸かしとけ」って言うんです。AさんBさんCさんにお産があると、母がAさんのお産をみている間に、私がBさん宅へ自転車で行って、「何時頃来るから、お湯を沸かしといてくれ」って言うんです。それで、母親はAさんが終わったらBさん、そしてCさんに行くんです。

昭和三五（一九六〇）年に、産院でお産ができるように産室を造りました。出産後、一週間ばかり休養してもらおう部屋が三部屋くらいあったと思いますね。お産というのは危ないときもあるでしょ。そうすると村山病院の村山先生に連絡して、飛んできていただいたようです。

時代が進むにつれて、家族の方たちが自宅でなくよそで産ませたいって、思ってきたんじゃないですか。家で産むと、お湯を沸かしたり、食事をさせたり、面倒じゃないですか。大変だから、産院に預けちゃう。ちょうどこの頃、法律で産婆の名称が助産婦となり、産院も「渡辺助産院」と改名しましたね。

母はうちで産んだ子には、頼まれて名前なんかも付けてあげていたみたいです。取り上げた赤ちゃんは一万五千人くらいになると言っていました。

「キャリアウーマン」

現代では普通ですが、妊婦検診もしていました。二か月間来ないと、自分から出向いていました。

昔は結構、農家のお父さんやお母さん
って、お嫁さんをいじめたじゃないです
か。「しよっちゅうお産婆さんのところ行
って。オレはそんなところ行かなくても、
ムシロの上で産んだ」とか言うんですつ
て。だからお嫁さんも気兼ねしちゃって、
「渡辺さんところ行つてくる」って言えな
い時代でしたよね。

でも母は「来なきやダメだ。昔と違う
んだから」と主張して譲らなかつたんで
す。もともと自分の意見は、煙たがられ
てもお構いなしに通す人でしたから。

それができたのは、自分の生家が大き
な農家の吉田家だからなんでしょうね。
母もそういう誇りがあつたみたいですね。
相手も「吉田さん」とこのあれだからなあ」
って。拒みづらかつたのでしょう。

母は戦後の言葉ではアプレゲールとい
うか、今でいうキャリアウーマンですよ。
大和田小学校で、産婆のかたわら、非常
勤講師として子どもたちにお産のことを
教えていた時期があつたんです。その時
の写真を見ても、周りの人が軍服や国民
服を着ているような中で、一人だけスー

ツを着てる。

パーマをかけたり、ラビットというス
クーターを乗り回したり。お産婆さんが
スクーターで来るっていうんで有名にな
ってましたね。行動的な人でした。

家庭での顔

個々のお産については、ほとんど話さ
なかつたですね。そのへんはプライバシ
ーをわきまえていたのでしょう。母が一
番悩んでいたのは、赤ちゃんが元気で
産婦が亡くなる場合。そういう場面に
合つたときには、涙ぐんでいました。救
えなかつたつていうことですね。

お産は病気じゃないつていうことは、
しよっちゅう言つてましたね。やること
をちゃんとやれば、全然心配ないんだつ
て力説していました。だから、お医者さ
んによる事故の話を聞くと、非常に憤慨
していました。

母の料理の腕はゼロに近いんじゃない
かと思っています。「できるのは雑煮くらいな
もんだ」つて、自分で言つてましたから。
料理とか家事の大半はお手伝いさんがや

つていました。

私にもあまり勉強しろとは言いません
でしたね。ただ、何事も継続しなさいと
うるさく言われました。「継続は力なり」
を口をすっぱくして言つてました。

いつも、割烹着を着てました。お産が
いつあるかわかりませんからね。

家でもよく勉強してました。亡くなつ
たときに処分したんですが、カルテも全
部自分で書いていました。お手伝いさん
もいましたが、人には書かせなかつたみ
たいですね。

仕事から帰つてきても、愚痴なんて聞
いたことなかつたです。生まれてくる生
命に対する喜びみたいなのが、とてつも
なくあつたようです。

忙しかつたですが、体を壊すことはな
かつたですね。体力があつたんだと思ひ
ます。身長はないけど、有名なくらいお
でぶさんでしたから。元気でしたね。

普通、農家つていうのは上意下達で、
意見言わないですよ。特に女の人は。
でも、母は吉田家のお父さんの葬儀な
んかでも、いつ法事をやったほうがいい

とか、お墓はこうしたほうがいいとか、ちよこちよこ言つて、「うるせえ」つて言われていたようです。

広く世の中のことを知ってるもんですから、社会の動向に目が届くという進歩的な自負心があったからのようです。

社会の役に立ちたい

母は社会の役に立とうっていう意識が強かったですね。昔は避妊や妊娠中絶は禁止されていましたから、貧しくても子どもはたくさんいる。そういう人たちに「次の赤ちゃんが生まれたら、うちに来なさい」と言つて、無償で預かったりしていました。新座市の福祉指定産院とかにもなっていましたね。

後になつてからですが、当時、女性がそんなにいなかったPTAの会長や民生委員もやっていました。

戦争中は、お兄さんが戦死しちゃったら、お嫁さんが残っちゃうわけですよ。そのお兄さんのお嫁さんと弟さんが一緒になる、っていう話がよくあったみたいで、その仲介を率先してやっていたよう

です。

仲人もしました。農家の次男、三男なんて、なかなか結婚できなかったじゃないですか。結婚相談所みたいに、「渡辺さんのところに行くと、農家に来てくれるお嫁さんを探してもらえる」つて言われてね。

仕事を辞めてから

七八歳で亡くなりましたので、完全に引退してから一〇年くらいはゆつくりしてましたね。私には、何時頃に車で迎えに来いと言つて、しょっちゅう姉妹の家へ行つてました。外に出ることは全然苦にならない人でしたね。

趣味っていうと、奇想天外な洋服を買うことでしたかね。昔の有楽町のそごうで「LLサイズ大会」なんてあると、必ず行きました。新聞を見て、私の家内に「連れて行つて」とか言つてね。そういうのには全然抵抗のない人でしたね。父親から「こんな派手な洋服は買ってくるな」と連れて行った家内が叱られてました。毎日のように日記を書いていたから、

残しておけばよかったんですが、家を建て替えた時に処分しちゃったんですよ。物を書くのは好きなようでした。字は下手でしたが、漢字はよく知っていました。平成元（一九八九）年に、「ちよつと便秘だから行ってくるわ」なんて言つて入院して、そのまま帰れなくなっちゃったんです。

私自身、ずっと母への尊敬の念を強く抱いていました。父が亡くなつた後、苦労して育ててくれた母に、親孝行しなきゃいけないという思いもあつて、大学卒業後も自宅近くの企業に勤めたんです。私の息子も新座を離れられないという気持ちがあるみたいで、市役所に入ったんですが、新人歓迎会で、「俺もお前んちのおばあちゃんに取り上げてもらったんだよ」つていう人がボンボン出てきたそうで、恥ずかしいやら何やらと言つてましたよ。

（聞き取り 平成二三年一〇月）

婦人会とともに歩む

並木 清子

大正四（一九一五）年生まれ
野火止在住

高等女学校から専門学校へ

鶴瀬村（現富士見市）で座敷簾（ざしきぼうき）の製造販売をしている家に生まれました。主に関西方面に卸していたようです。五人兄弟で、私は長女でしたが、家事を手伝いなさいとは言われませんでした。父は勉強したくてもできなかったもので、子どもに理解があつたのでしよう。

小学校二年生の時に、関東大震災がありました。学校からの帰りだったので、揺れがおさまるまで道端にしゃがんでいましたね。余震があつたので、夜も家の

外で過ごしたのを覚えています。

川越高等女学校へ通いました。いつもは、着物、袴、革靴でした。体操の時間は、上は着物で、下は小学校のときの礼装用の袴を仕立て直したブルマーと黒靴下でした。三年生になった時にジャンパースカートを着用してもいいことになり、四年生になったときは、ほとんどの学生が洋服姿でしたね。

校内には寄宿舎があつて、秩父出身の学生が一〇〇人位、寄宿していました。そうそう、駅の近くに団子屋があつてね、いい匂いがしたの。でも買い食いができず、いつも嗅ぐだけで我慢をしていた。

ました。

その後は、共立女子専門学校に通いました。東上線は三〇分に一本でしたが、乗り遅れそうになっても、声をかけると発車を待つてくれました。上福岡から池袋までは農村でしたからね、乗客は学生だけで、勤め人はいませんでした。

中央線に乗り換えて水道橋で降りたのですが、ここで下車するのは学生だけでした。土曜日は、一つの車両に乗客は二、三人でしたかねえ。校舎は靖国神社の向かい側で、彼岸の頃は参道に人があふれていました。それが珍しかったですね。共立を卒業後は、南畑村（現富士見市）

公民学校で裁縫を教えていました。

昭和一一（一九三六）年、上福岡駅前
に並木の親戚がいた縁で、新座の並木家
に嫁ぎました。

昔から畑仕事をしたことがないのに、
並木家は畑が二町もありましてね、実家
に帰ろうかと二週間悩みました。でも親
に申し訳ないので頑張ろうと決心して以
降、一切愚痴は言いませんでした。

姑が良い人で、家事はしなくてもいい
からと、近所の子たちに裁縫の教授がで
きるように、取り計らってくれました。

夫が新座町長に

主人が昭和一九年に召集されたので、
近所の人たちに手伝ってもらいながら女
だけで畑作業をしました。百姓をしてい
たので、戦時中でも食えることだけはで
きました。

戦後、公職追放があつて、当時の大和
田町長が追放されました。すると、町会
議員の方たちが、主人に「次期町長にな
ってください」と連日家に来ましてね、
夜の二時頃まで粘っております。

町長になった後も、町会議員たちは毎
晩のように当家に来て飲んでいました。
大事な集まりなので、夜遅くまで接待し
たものです。当時は町に飲み屋さんがな
かったのですよ。

昭和三〇（一九五五）年に大和田町と
片山村が合併して、新座町となりました
よね。主人がその町長をしていた頃も、
議員たちは毎晩のように当家に集まり、
よく議論をしていました。

片山地区の議員が、「片山小学校の前の
道は曲がつたままでもいい」と言い張つて、
まっすぐにしようという町長に向かつて
「この馬鹿町長、馬鹿町長」と怒鳴りはじ
めてね。主人は黙って耐えていたんです。
町長職は大変なのだ、かわいそうだなと
思つてね。大事にしてあげなくちゃと思
つたものです。

婦人会の発足と活動

昭和二七年に、小学校教諭をしていら
した菅沢の渡辺トミさんが先頭に立つて、
大和田婦人会を組織しました。会員は約
三〇〇人でしたね。

当時の女の付き合いは隣近所のみでし
てね。それも結婚式や葬式の手伝いでし
やべるくらいでした。女は遊べなかった
し、勉強をしたくてもできなかった。選
挙権もあるし、男女同権なのにおかしい
でしょ。それで何とかしようと思つたの
です。

町内のご婦人皆さんが参加すると言え
ば、家族は近所の手前もあるので出して
くれるでしょ。ほとんどの方が入会しま
したよ。

婦人会の行事はね、初めの頃は町内会
ごとに「勉強会」と言つてお茶飲み会を
しました。そのうちお花や踊りなどの練
習、一年に一回は旅行もしました。

揃いの上着も作りました。農家の方に
言われましてね。「集会の時、着物をきれ
いに着てくる教員の奥さんと、野良を抜
けてくる自分との服に差があるので気後
れがする」つて。それでね、着物の上に
でも洋服の上にでも着られるような上着
を作ったの。同じ上着をはおれば、下に
何を着ても同じ立場で話せるでしょ。
総会の会場は、旧大和田交番あたりに

あった町役場の二階でした。参加者がとても多い時がありましてね。床が抜けると言われましたので、平林寺の檀家である塩野さんの口利きで本堂を借りたことがありました。

このとき、平林寺のお坊さんが使っていた雑巾が使い古されていて網の目のようになつていたんですよ。それがあまりにもあわれだったので、その後三〇年間にくらい、雑巾三〇枚を寄付していましたね。

東京オリンピックで接待も

当時は、台所仕事をするのに、野火止用水や井戸から水をくんで使っていました。水道が欲しくて、町内会とともに水道貯金を始めました。いくらずつ集めたかしら、覚えていませんね。お酒一本が百円の頃でした。

また、昭和三九（一九六四）年の東京オリンピックでは、射撃場が朝霞の自衛隊だったので、接待を担当しました。このときは、天皇陛下がご来場なさったのですよ。

町内会長たちの反対を押し切り、七六歳以上の方をお祝いする敬老会を毎年行いました。町内会が認めてくれたのは、何年か後になってからでした。

新座警察署が開設された時、慰問に行きました。うどんを作って皆さんに差し上げたのですが、署員の方が多くて午後二時過ぎまでかかったのを覚えています。大和田小学校には頼まれて何回か行きましたね。夏休みにうどんを作りに行ったり、手作りしたお手玉を持参して、遊び方を教えてあげたりしました。裏山の杉林の近くの堆肥からカブトムシがたくさん出てきて、子どもたちが大喜びしたこともありました。

民謡や料理の講習会も

民謡に合わせて一緒に踊れば、皆さんが楽しめるのではないかしらと思いついてね。指導してくださる講師をお願いしよう、と、新座町長だった主人に同行してもらって埼玉県庁に行きました。県庁には主人と同窓の浦和高校出身者が多く、話が早かったですね。

昭和四〇年には、開校したばかりの跡見学園に「婦人のために講義をしてくださる方を紹介してください」と頼みに行きました。このときも、町長に同行してもらっています。国文学の伊藤嘉夫先生が、市内の野火止に住まいがあるからとおっしゃって受けてくださいました。

初めての古典文学の講義で「昔、夫婦は別居していて、男が妻のもとに通った」と習い、「へえ、男の人が行ったんかい」とみんなで感心したものです。

短歌の指導もお願いしました。「にひくら短歌会」として、先生が亡くなられた後も活動しています。当時は四〇名いたのですが、会員も年をとってね、今は一名ですかね。

昭和五〇（一九七五）年には、県議会議員になつていた夫に同行してもらって、県庁に行きました。バランスの良い食事を作って家族の健康を守りましょうと、料理教室を開くことにしたので、その指導者を派遣してもらうためです。朝霞地区四市のために開設された朝霞保健所に、栄養士を配置していただけることになり

しました。その後、栄養士に定期的に指導に来ていただいています。

さまざまな組織の会長に

毎年一月には、駅の前などに並んで皆さんが共同募金活動をしています。社会福祉協議会ができて私が会長になってからは、初日の朝には必ず「皆様、ご苦労様です」と、募金をしている場所に挨拶をして回りましたよ。朝早くからずつと立っているのは本当に大変なのです。

この頃、市役所から依頼されて、「交通安全母の会」を作りました。PTAに声をかけたのですが、見向きもされませんでした。今では大きな組織になっていますね。

食生活改善推進員協議会の事業で一番覚えているのは、越生に行って「減塩梅干し」の作り方を教わったことかしら。今までの梅干しは塩分が多くて、体に悪いでしょ。塩を半分にして焼酎を入れるの。健康に良いからと、新座でずいぶん広めましたね。現在は、皆さんがこの作り方をしています。

そのほかにも、朝霞地区更生保護婦人会の会長など、いろいろ務めさせていただきました。

それからね、とても大事だと思っていることがあります。口で言っているだけではダメなのね。自分でやらなくちゃあ。一年に一回「新座市福祉バザー」をしていますね。準備をしていると、たくさんゴミが出るでしょ。いつだったか一人で片付けていたら、ボーッと見ていたほかの班長さんたちも「おれらもしなくちゃいけないかな」と一緒に片付け始めたのよ。

昭和六三（一九八八）年に熊谷市で「埼玉博覧会」があつてね、私たちは民踊を踊りました。博覧会が終わった後、皆さんとゴミを片付けていたら、散らかしていただけのよその子どもたちも、真似をして片付け始めたの。

そうでしょ。行動で示すことが大切なんです。

敷地内に住む子どもたちと

月に一回くらい、家族で集まります。

子どもたちは同じ敷地内に住んでいますよね。

趣味は、写真・短歌・詩吟・カラオケでしょうか。カラオケの機械には、私の知っているような昔の歌が入っていないので、最近「千の風になつて」を歌います。それに、手芸教室を開いております。皆さんに手芸を教えています。

（聞き取り 平成二十二年九月）



人口急増期の石神に住んで

宮澤 春美

大正八（一九一九）年生まれ
石神在住

「都落ち」して新座に

長野のサラリーマンの家に生まれたんですが、父の仕事で転勤が多く、女学校を三回替わったんですよ。結婚してからも主人の転勤が多くて、新座には昭和四二（一九六七）年に来ました。

ここに来る前は葛飾の団地にいたんですが、どっかに家を買わなくっちゃっていうのがあって、主人が電車の吊り広告を見て決めちゃったんです。見に来た時は、「いやだな、こんなところ」って思いましたね、「都落ちじゃないの」ってね。

西武線のひばりヶ丘駅は、当時北口が

なくて南口から降りしたんですが、踏み切りでよく待たされました。南口の駅前に萱葺（かやぶ）きの大きな農家があったんですよ。バスは通っていたんですが、ひばりが丘からの県道（保谷志木線）が舗装されてなくて、ガタガタ揺れてすごい埃（ほこり）でした。でも自転車を利用する人が多かったせいか、バスはすいていましたね。

このあたりはお店がほとんどなくて、県道沿いの「火の見下」へ出る道に一軒だけよろずやさんがあったんです。そこのおばさんが「今日、ご用はありますか」って言ってくれて、「ひばりへ行ってお魚を

買ってきてください」って頼むの。山の中と同じね。大きなポリバケツも買ってきてもらいましたね。あとは出かけた時に西武デパートで買ってきたりしました。

建て売り団地に入居して

主人が買った家は、大蔵屋団地という建て売り住宅三〇戸くらいの戸建て団地で、一斉に入居したんです。

入居して間もなく、天井から雨が漏るんですよ。それに向かいの渡邊さんの家の合板の屋根が大風でうちのほうへ飛んできたんです。家は大丈夫だったんですけど、塀が崩れちゃって。それで、承知

できないってことで、同じ団地の「慶応ボーイのおじいちゃん」から、厚さん、高野さん、私の三人に世話役をしてくれないかと頼まれたんです。

私は四〇歳そこそだったんですけど、会計を引き受けて、三人で池袋の大蔵屋本社に何回か足を運んでね。徐々にいろいろ直してもらいましたが、雨漏りは結局、個人で直しました。費用はずいぶんかかりました。

それが自治会の始まりだと思います。いろんな規則を作ったりしました。今は毎年会長さんが変わりますけど、当時は三年くらい続けてやっただんですよ。「慶応ボーイのおじいちゃん」を先頭に、私たち「三羽がらす」は若かったし、走り回っていましたね。

大蔵屋との交渉が一番の仕事でした。他に私道修理の貯金を始めたり、親睦会をやったり。秩父へ日帰り旅行に出かけたのが一番印象に残っていますね。

当時はみんな引越してきたばかりの人たちだから、先輩も後輩もなく、みんな仲が良かったです。今も仲が悪いわけ

ではないけど、親睦する場がないからかしら、奥のほうの方の顔を知らないですものね。

団地以外の人や地元の人との付き合いはなかったですね。地主さんがいても、このあたりは畑はやってなくて、草ぼうぼうだったから。「あだちの」のあたりは葦が茂っていて、かくれんぼができるくらいだったんですよ。

たびたび氾濫した黒目川

昔の黒目川は今より北側、うちの裏側を流れていたんですが、幅が狭くてよく氾濫したんですよ。うちのほうは地盤を上げてあったので無事だったんですが、石神住宅側（もとの黒目川の北側）は、大雨が降ると必ず床上浸水でした。悪いから二階の窓からそーっと見ると、みんな畳を上げてましたよ。そんなことが続いたので、役所で工事して黒目川の流れを変えたんですね。

それまでは、東久留米行きのバスが通る宝泉寺のバス停まで、かなり遠回りしなくちや行くことができなかった。それ

で川の中に飛び石のように石を転がして、トントンって渡れるようにしてたんです。雨が降ると、「だめよ、すべるから」って、そんな状態だったんですね。

下水も流していたから、水が真つ白の時や赤い時もありました。今はきれいになって、名勝地みたいになりましたけど。

お花と裁縫で生計を

ここにきて四年目に、主人が五九歳で亡くなりました。障がいのある長男と九〇歳の義母、大学に入ったばかりの次男をかかえて、私はしょっちゅう神経性胃炎になっちゃって。一週間くらい水もなにも通らなくなっちゃうんです。

当時、主人の主治医だった小熊医院で賄いの仕事をしていたので、大変な時はお宅の二階に泊めていただいていた。先生の奥さんや看護婦さんが私の家にきてご飯を作ってくださいたりして。いい方に恵まれてね。

家のローンもまだ残っていたので、遺族年金の他に、何をすればお金になるか考えまして、お花とお裁縫を教え始めま

した。二〇人くらいお弟子さんがいました。

それから、ひばりが丘に越後屋さんっていう呉服屋さんが今もあるんですけど、あそこの仕事がどんどんきましてね。前の日に持ってきて、明日の朝までに仕立てて、なんていうのが多いんですよ。ですからがんばって仕上げました。若かったですね。健康だったからできたんですね、こんなに長生きするくらいだから。

お花は、女学校に入った一三か一四歳の時、母に言われて、それからずっと続けてきました。お裁縫は、女学校を出て、裁縫学校って今の短大のようなところに行かされて、和裁も洋裁もやっただんです。

でも、お嫁にきたら、おばあちゃん（義母）が裁縫の大ベテランで、私が習ってきたことは「いっさい捨てなさい、私のほうに従いなさい」って。厳しいおばあちゃんですね。私がせっかく学校で習ったことは「机上のもの」だと。

でも、今考えるとよかったですよ。家庭科の教師を三〇年もやったおばあちゃんだから、要領がよくてきれいにできる

んですよ。私の母は怒ってましたけどね、「何のために学校に行かせたんだか」ってね。

実際、ほんとの母と暮らしたのは、学校出てからだと四年か五年しかないんですよ。母から何か習ったかっていうと、あんまり覚えていないんです。おばあちゃんとはお嫁にきてから三二年でしょ。長いですよ。

障がいのある長男のこと

長男は、ここにきた当初は東京の障がい者学校に通っていました。主人が亡くなつて、私がしょっちゅう胃を悪くするんで、小熊先生が心配して、当時、市の嘱託医をしていらした関係で福祉課に話してくださいました。そうしたら、そのおかげもあつてか、長男は今の羽生の施設に入ることができました。県のモデル施設で素晴らしいところですよ。

休日が続くときは自宅に帰れるんですけど、今年のゴールデンウィークには孫のお産があつたりして、忙しくて迎えに行かなかつたんです。そうしたら面会の

時に「夏休みは帰れるかね？」って聞くんで、かわいそうになつてね。「大丈夫だよ、待ってるからね」って言ったらホッとしてましたけどね。

羽生の施設には、もう親のいない人もいますけど、私もあの子がいるからがんばらなくっちゃ、って気持ちですね。おかげさまで健康なもんですから。どこも悪くないんですよ、百まで生きるよ、なんて言われています。今でも月に一回は一人でバスや電車を乗り継いで羽生まで通っています。

（聞き取り 平成二三年六月）

（ご長男の謙一さんは平成二四年一月
ご逝去されました）

